

公孫樹

東京都立
豊多摩高等学校
令和7年3月
第66号
東京都杉並区
成田西2-6-18
TEL 03(3393)13



「公孫樹」

学校長 板倉 和則

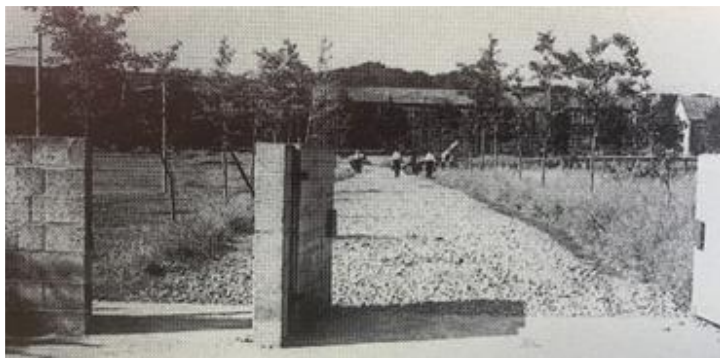
本校のシンボルであるイチヨウには様々な漢字が当てられます。その一つが「公孫樹」、他には「存じ」「銀杏」があります。「銀杏」は実(実は種)の形が杏に似ていることに由来します。また、英語では *ginkgo tree* と言いますが、これは銀杏を読み間違えたのではないかと説が有力です。「鴨脚樹」という漢字表記もありますが、イチヨウの葉が水かきのついたカモの足に似ていることからつけられたようです。しかし、*leg* と *foot* の違いにこだわりたくなるのは英語科教員の性でしょうか。

さて、公孫樹ですが、私はこの表記がいちばん気に入っています。「公」は祖父の意、祖父が種をまいて「孫」の代に実になる「樹」という意味だとか。ふつうに考えれば、実になるまでに数十年と考えるべきでしょうか。家族の系譜にもロマンを感じるところですよね。

同窓会報に本校の公孫樹の歴史が記されています。昭和三十二年、当時在職されていた生物の先生が井の頭自然文化園から苗木の払い下げを受け、三回に分けて三輪トラックに乗せて運び、在校生に手伝ってもらって植えたとあります。というわけで、ひょろひょろとした若木の頃からおよそ七十年が経とう

としているのです。

イチヨウの花言葉は「長寿」「莊嚴」などとされます。調べたところによると、佐賀県有田市には、樹齢推定千年を超え、国の天然記念物に指定されている大イチヨウがあるとか。本校の公孫樹も、永遠の美と力強さに満ちて今も天に届かんと背丈を伸ばし、夏は枝を広げて葉を茂らせ、学友たちの登下校時の日差しを遮ってくれています。有田の大イチヨウに比べればまだまだ幼くこれからも長きに渡ってまだ見ぬ豊多摩生を守り続けてくれるのだらうと思いを馳せています。



創立 50 周年記念誌より

Touch the Sky! TOYOTAMA!

「挨拶」

副校長 土崎 祐一郎

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様におかれましては、長い間のご指導が実を結び、心よりお祝い申し上げます。学校とも連携・協力していただきありがとうございました。

一年生、二年生の皆さん、進級おめでとう。一年生は、これまで通っていた中学校での学校生活から一変し、大半の学友が公共交通機関を利用して通学することとなり、午前八時三〇分から直ちに授業が始まり、授業内容も濃くレベルも上がり大変だったと思います。二年生は、授業と並行しながら学校行事や部活動の中でそれぞれが役割を担い、仲間とともに協力しながら運営に携わってきたと思います。この一年間の経験を次に生かしてください。

さて、茶道や私が入組んでいる剣道の世界に「守・破・離」という言葉があります。

「守(しゅ)」は、師の教えや決められたことを徹底して学び取り、それを繰り返して学んで基礎的なことや基本的なことを確実に身につけることをいいます。

「破(は)」は、そのように厳格に指導を受けたことから一歩飛び出すということです。自分でいろいろと試行錯誤を繰り返して、あるいは師の教えとは全く反対の方向へ踏み出してみることがあります。自分の力で自分の想像力をたくましくして、自分を鍛えなおしていくということです。

「離(り)」は、それらの段階を経て、あるいはそれらを全て忘れて、何事にもとらわれることなく、自分自身の独自の世界を確立することです。

今、生涯学習とか生涯スポーツという言葉やSDGs

(持続可能な開発目標) など、何かを続けていく、又は、何かをし続けられるということが言われています。私は剣道を五十年ほど続けていますが、まだ「守」の段階で修行中・継続中です。

科学技術の発展やグローバル化の進展により、社会の変化のスピードは加速度的に速くなっています。が、うまく対応しながら自分の力で自分の生き方をみつめて、充実した人生を送ってほしいと思います。

「思想家を一人選んで調べ、レポートにまとめなさい。四〇〇字詰め原稿用紙五十枚以上」

進路図書部 横堀利明

タイトルにあげたのは私の高校二年時の「倫理」、夏休みの宿題である。先輩からは「先生が全部読むことはないから半分くらい白紙で書いてもバレないよ」と言われていた。事実のほどはわからない。私は五十枚は書いたけれど、あれこれ調べることはできず、中公新書の「聖徳太子」(田村圓澄)を一冊だけ読んで、これをまとめて提出した。二学期は調べた思想家について生徒が報告する授業が続いた。私は聖徳太子の生涯について話をした程度の発表しかできなかったが、友人から次々と質問が出て、それに答えていくことが楽しかったことを覚えている。思えばちょっとした教育実習みたいなものだったのかもしれない。試験のためとか、受験に必要だからという理由だけで勉強できるものではない。どんなことにも興味を持って取り組んでみたらどうだろうか。私は文系だが、生物でプラナリアを使った実験が面白くて仕方なかった。地理の授業で、映画をみて感想をまと

めたものが先生にほめられて要約に自信がついた(要約は今でも結構自信があります)。高校三年生の時には本を読むことが面白くなってしまつて、勉強そっちのけで本を読んでいた(はつきりいつて逃避です)。十五冊読んだ月もあり、その時は中公文庫の「日本の歴史」を三冊読んだ記憶がある。「日本の歴史」を読んだのは受験を意識していたためだが、残念ながら興味のある古代から鎌倉までしか読まなかった。知識は偏っていた。国語科の教員として授業をする上ではものすごく役立ちましたが。

私の卒業した高校では進路部が存在せず、今のようないろんな細かい進路指導は行われなかった。もちろん授業も「受験に必要」なんていう言葉はなかった。何しろ文系理系問わず、三年で日本史、世界史、政治経済が必修だったなんていう学校だ。結局私は浪人をして、学校にはなんの恨みもない。ちなみに私が翌年入学した大学の倍率は28倍だった。

目先の損得を考えず、色々な勉強に好奇心をもつて取り組んでみよう。受験科目しか勉強しないなんてサプリメントだけ飲んで栄養補給しているようなものだ。色々なことにチャレンジして好きな学問を見つけてよう。学問でも仕事でも自分で面白いと思わなければ絶対に続かない。

「令和6年度を振り返って」

生徒保健部 今井 一雄

昨年度もこの公孫樹に原稿を書かせてもらいました。覚えていらっしゃる方は皆無だと思えますが、都内の私立高校の卒業式での答辞を話題としました。何の因果かこの秋、顧問をしているサッカー部が全国選手権

二次予選でこの高校と対戦。リードする展開からアディショナルタイムで失点し、痛恨の逆転負けとなつてしまいました。相手選手の最後まであきらめない強い精神力に感心したと同時に、受験勉強と両立しながら、十月まで部活動に取り組んでくれた本校の三年生も立派であつたと思いました。後日、応援に来てくださった部員ではない保護者の方から、タイムアップの瞬間にグラウンドに突っ伏して泣いている選手たちを見て、久しぶりにこみ上げてくるものがあつたと声をかけていただきました。

これはあくまでひとつの部活動の例です。令和6年度に豊多摩高校のすべての活動で同じようなドラマがあつたのだと思います。合唱コンクールでもたくさんの生徒の涙を見ました。部活動の運営が上手くいかず、ポロポロと涙をこぼしている生徒もいました。この歳になって、泣けるほど物事に熱中できるのは若者の特権なのだということを強く思います。以前、勤務した学校で「髪を振り乱して汗もぬぐわず、一生懸命やるのが、恥ずかしいことではないんだ」ということを学びました」と言ってくれた生徒がいました。豊多摩高校の皆さんはそのことをしっかりと理解して、令和6年度の学校生活を送ってくれていたと思っています。

来年度も学校行事で、部活動で、日々の生活の中で「バッション!」と叫びながら、笑顔で活動している生徒の姿を見られることを願っています。

